

CASA新聞

発行 株式会社カーザミカワ
 岡崎本社 ☎0564-24-2511
 岡崎市吹矢町8番地
 豊田営業所 ☎0565-28-3891
 豊田市豊栄町6丁目1番地

木材商況

値上げ相次ぐ

年初以降の建材の荷動きはやや低迷基調となっている。新設住宅着工は6カ月連続で前年割れ、12月の年率換算値も昨年1年で最低値となったことが影響している。依然として好調なのは分譲ビルだ。大手ハウスメーカー、貸家、マンション、リフォームはいずれも勢いがいい。好調だった非住宅向けも工事の端境期で減速感がある。木質建材では南洋材合板の大幅な値上げにより、フローリングではイクタが先陣を切って値上げを表明。ノダ、朝日ウッドテックなども3〜4月以降の値上げを打ち出した。接着剤の価格も上がっており、他の建材でも値上げがある公算が大きい。

木質建材では特に複合フローリングで基材の輸入合板のコスト上昇によりメーカーが値上げに動いている。イクタが3月21日から全商品10〜15%値上げ、ノダも南洋材基材の複合フローリングが3月1日から値上げする。基材はパーティクルボード(PB)やMDFもコストが上昇。接着剤、梱包材や輸送費なども上昇しており製造コストは大幅に引き上がった。複合フローリングにおける国産材基材率は26%前後。企業によっては30%近くに達しているところもある。MDFやPBなどを基材としたフローリング生産も増えており、基材は南洋材一辺倒から脱して多様化が進みリスク分散が進められている。

市場占有率の高いグラスウールも供給タイプも相まって、断熱材需要は縮まっている。一方、断熱材メーカーは住宅の高断熱化の流れに対し「早いところは既に対応済み。2020年の省エネ義務化を前に19年に出荷のピークが来る」と考えていたが、これも進み具合が不透明だ。期待感はあるが過剰な期待を抱いてはいない」と口を揃え、冷静な見方を示している。断熱材は品番ごとに品薄品があり、在庫潤沢とはいえない。だが、今のところ供給不安もなく、顧客に買い焦りはない。

一方、現場発泡品は需要を伸ばしている。断熱性能や施工など、住宅の断熱に関わることを全てメーカーに任せられる点も需要拡大につながっているとの指摘も。ボード系はプレカット需要が高まっている。これに呼応し、従来からの占有率が高かった床面で需要がさらに伸びている。一方、ボード系の品目間競合も聞かれる。外装材はメーカーや

商品ごとに温度差はあるが、戸建て向けの出荷は鈍い。特に市場占有率の高い窯業系で年初出荷の立ち上がりが悪い。窯業系の1月の生産量は707万6000㎡、販売量は797万4000㎡。メーカー各社は戸建て向けで付加価値品の販売攻勢を強め、売り上げ確保に努めている。戸建て向けは分譲が底堅く、販売量を押し上げている。金属系は依然として主力のリフォーム向けが今一つ新築向けは、新商品販売を足掛かりに販売量が伸びているとの手応えも。窯業系と金属系ともに、配送コストが上昇している。メーカーから「長尺材を扱える業者は限られている」との声も聞かれ、業者確保のために値上げを受け入れざるを得ない。家庭用ヒートポンプ式給湯器(エコキュート)の2

017年の出荷台数は、43万6962台(前年比3.9%増)だった。ガスを動力とする潜熱回収型給湯器(エコジョーズ)に比べ価格は2倍以上だが、01年の発売以降、省エネやオール電化の普及などの流れに呼応し、販売を伸ばしてきた。出荷台数は過去5年で最多となった13年の44万2150台には届かないものの、15年以降3年連続での増加だ。ZEH+やZEHといった住宅の登場により、今後の出荷拡大も期待される。ZEH+やZEHには高効率給湯器が欠かせないためだ。高効率給湯器にはエコキュートやエコジョーズのほか、発電能力があるエコウィル(動力はガス)やエネファーム(動力は水素)がある。こうした品目と、どのような住み分けにも注目だ。

丸太輸入、

58年水準以前に

2017年の主要外材輸入量は製材品が横ばいだが丸太が9%近く減少した。全ての丸太が減少したのは前年の在庫調整のほか、産地側の対日出材力が高まらなかったためだ。合板をはじめとするボードや構造用集成材は前年を上回るなど、わが国の市場の盛り上がりを反映した。

日本木材輸入協会が集計した昨年の外材輸入量は丸太、製材品合わせて974万3千3百22年ぶりに1000万3千を下回った。製材品がほぼ横ばいながらも2年連続で増加した一方、丸太は327万50003で1958年の334万3千を下回った。50年からの統計では、南洋材は下から2番目、ロシア材は同4番目、米材が同14番目という低さだ。に欧州材ではリスタを多く、取扱量の多い丸太は全体で32万3千減少した。

たが、その半分強が米材で約18万3千減、次いでNZ材が6万70003減と、入荷の多い分野での減少が目立っている。南洋材やロシア材については産地の供給事情が硬直化して、国内の丸太消費側の関心も薄れている。一方、製材品は欧州材とチリ材が前年を上回り、他の分野の製材品の減少を補った。しかし、前年は欧州材、なかでも間柱など割物で輸入ギャップが大きく生まれ、輸入元が多大な損益を被った。

句から3月にかけて相場も緩んでくると見られており、高値の丸太を抱えたままの工場の抵抗感も強い。現状は安値が一部で聞こえ始めた程度で相場の崩れは見られないが、工場と問屋・市場、買い手の三方で価格の居所の探り合いとなっている。

2月の役割
 中部地区の役物製品販売は、昨秋から続く役物の高年齢大経原木の価格が上昇している中でも、住宅向けの需給減などから製品価格への転嫁が困難な状況だ。

年明けからプレカット向けの荷動きが落ち着き始めていたが、今月は特に3大都市圏を中心に需要鈍化が目立つ。例年2月は引き合いが一服する時期だが、今年は大雪の影響で北陸を中心に現場の遅れが多く、製材の納入が更に落ちているとの声もある。市場や問屋への入荷の回復具合は地域や品目ではばらつきがあるが、需要の減速に伴い需給は概ね緩和してきた。2月下旬

米材製材のうち194万3千はカナダ産で、安定した供給が続いている。チリ材は2008年の32万3千に次ぐ9年の供給減分がチリ材へシフトしている。合板は、輸入量は300万3千に達しなかったが前年比増となった。これは前年の減少分の補完と建材などの需要の堅調さが影響している。MDFも国内需要が旺盛で、ラワン系、針葉樹系ともに引き合いが増えた。ただ、北米内での需要がタイトになったことやファイバード用チップ丸太の入手難で生産が盛り上がり、に欠けるメーカーもあった。

構造用集成材は86万70003で前年比12.5%増と大幅に伸び、過去最高を記録した。建築用材のエンジニアードウッドの採用が増えている。

東濃、吉野、天竜材などを扱う大手木材市場は「役物柱等、住宅用の既製品を工務店が在庫を持つことはなく、需要が増える要素は見いだせない」という。このため、製材工場は社寺向けなどにきめ細かく対応できるかが問われると指摘。

東濃から内装材を生産している工場は一貫量、価格の安定を実践してきたので販売は堅調だが、原木の値上りは予想を超える水準で今も続いていると話す。直近の見積りは値上りを反映したものに改めている。

表示説明

市況状況

値下げ
 横ばい
 値上げ

ラワン薄ベニヤ	値下げ
ラワン正寸12mm T2	横ばい
針葉樹12mm 3×6	値上げ